

ドラマティック日本史 第4弾

「異界」平安の都

～「社寺史跡」～京都 魔界スポット～

講師：若村 亮 先生

日時：1月19日（月）10：00～11：40



■京都三大葬送地

平安時代、京の都・平安京で亡くなった人びとは、洛外へと運ばれて葬られていた。仏教の影響を受けて、平安時代の天皇や貴族など身分の高い人物は火葬されていたが、火葬には木材が必要であるなど経済的な負担があることから、一般的に庶民は風葬されることが殆どであった。

◆鳥辺野

清水寺の辺りから泉涌寺の辺りまで、東山・阿弥陀ヶ峰の麓一帯にある。かつて死者は樹木に吊されて、その身体を鳥に喰わせる“鳥葬”も行なわれていたことから、“鳥葬の野原が広がる・・・”という意味から「鳥辺野」という地名になったとも伝えられている。

◆蓮台野

船岡山の西側一帯にあたる。この船岡山の周辺の地名を「紫野」と呼ぶが、一説には、遺体から流れる血（紫色）で染まったことに由来して地名が紫野になったとも言われている。

ちなみに、蓮台野へ遺体を運ぶために使われた道には多く（千本）の卒塔婆が立ち並んだことから“千本通”と呼ばれるようになったとも伝えられている。

◆化野

嵯峨の奥、化野念仏寺の一帯にあたる。愛宕山の麓に位置し、平安時代は風葬の習わしが伝わってきた地であり、遺体は野さらしであったという。多くの遺体を見て哀れに思った弘法太師・空海が、化野念仏寺の前身となる如来寺を建立して供養し、後生になって浄土宗祖・法然上人が念仏道場に改めて現在の化野念仏寺が創建され、その境内には訳 8000 体もの無縁石仏が安置されている。

★六道珍皇寺

京都では「六道さん」の名で親しまれる寺院で、お盆の“精霊迎え”に参詣する寺院として知られている。付近はかつて死者を鳥辺野へ葬送する際の延野辺送りの場所にあたり、“この世”と“あの世”の境目とされた「六道の辻」と呼ばれてきた。

伝説では、昼は嵯峨天皇に仕えて、夜は閻魔大王に仕えていた小野 篁が、冥府へ通った入り口は当寺の井戸であったという。閻魔堂には小野篁作と伝えられる閻魔大王像と、等身大の小野篁像が合わせ祀られている。毎年8月7日～10日は「六道まいり」が行われ、精霊迎えの「迎え鐘」を撞くために多くの参詣者が訪れて賑わう。



●小野 篁 冥途通いの井戸

本堂の東側②位置する庭園には、小野篁が冥途へ通うために使ったという井戸があり、近年、旧境内内地より冥途から帰ってくるために使ったという「黄泉がえりの井戸」が発見された。

★一条戻り橋

橋は平安京当時と同じ場所になる。一条通りは平安京の一番北の通りにあたり、この橋が洛中と洛外を分ける橋でもあった。

